

初公開!

飛翔ができるまで

学部広報誌というたいそうな名目を頂戴しつつ、学生にとっては年度始めの「編集委員募集」のときくらいしかその名を聞く機会はなく、教官にとってもいつ出るのかすらわからない、謎のベールに包まれたまま、総科とともに歩んできた「飛翔」。その内実が、ついに明かされる時が来た! 見よ、これが飛翔編集委員会の真の姿だ!!

10月18日: 51号の打ち上げ

秋休み中は皆の都合が合わず、10月も下旬になってからの打ち上げとなった(場所はビール園ネオ高山)。しかし、オリキャン準備会議の取材など、52号へ向けての活動はすでに始まっていた。この日も、打ち上げとはいえ、51号の反省、そして次号をどうするかと、酔っぱらいたちの白熱した議論が展開するのであった。

10月21日: 第一回編集会議

本格的に編集会議が始動! とにかく10月中旬に企画内容を決定するのだ。この日は夜9時過ぎまで特集の内容についてアイデアを出しあった。結局この日の案はすべてボツになるのだが……合同編集会議まで、企画案を練り上げる日々の始まりであった。

10月31日: 合同編集会議

教官、事務官を含めての会議である。実際には学生編集委員が決定した企画内容を報告し、教官と事務官に仕事を割りふるだけだが。

なんとかこの日までに企画内容と取材方針を決めたものの、全体のテーマは当初の「歌舞伎(おふざけ)」から「激動」へ大転換。またページ数の間違いに気づくなど、まさに激動の編集作業の幕開きとなった。ヤレヤレ……



せっかくつないだのに……



みんな足がだらしない

11月8日: HI-NET 導入

4月から要求していた学内LANの接続がようやく実現。しかし通信ソフトをインストールするためワープロソフトを削除し、それでもHD容量が一杯で動作不安定。しかもEメールの設定がわからず、教官への依頼原稿をEメールで楽々回収! の夢はもうくも崩れさった。激動だ……

11月11日:

えーっ、FDD ぶっとび!! メールが使いものにならないと判明したばかりなのに、次の致命的な危機が編集委員たちを待ち受けていた。なんともう一台のデスクトップ

機のフロッピードライブがぶっ壊れたのである! もう一台はHI-NET 端末専用にしてしまったので、プリントアウトできるのはこのパソコンだけになってしまった、途端にだ!



幸い、翌日には単にFDDの機嫌が悪かっただけ(?)とわかり、なだめすかして作業は再開した。それにしても心臓に悪いぞ!

11月14日: 激論で午前様

この前日にオリキャンのスタッフ正式募集があり、会議録記事化の承認もしてもらわなければならないなど、にわかに作業量が増え出した11月中旬。この日はさらに、今回の特集の柱であるカリキュラム改革の記事構成について編集委員間で意見が食い違い、激論は真夜中過ぎまで続いた。超ハードだ……



お願いしますよ〜
そこをなんとか〜

11月後半:

教官へ原稿依頼、

オリキャン取材依頼

パッケージ科目を実際に担当する教官から、現場の声を聞こうという主旨で原稿を依頼(Eメールのはずが電話で)。ところが断られまく、教官の選択はしまいにサイコロで決定。なおも断られ続ける。結局、品川先生が三回連続の飛翔登場となった。誰のせいでもないけれど……

またこの時期、オリキャンメンバーと記事化について話し合い。飛翔編集室(の汚さ)の宣伝に成功。

11月25日: 編集長忌引き

という忙しさの中、学生編集長、突然の忌引き(マジで)。お悔やみ申しあげます。しかし、当時の他の編集委員の頭の中は「人手が足りん……」。シャレにならんほど激動すぎる!

12月中旬:

発狂に至る

果てしない道のり

年越しが近づき、いい加減にヤバい雰囲気編集状況。未だにカリキュラム改革の内容が二転三転、議論空転、頭

脳捻転、疲労頂点。

一体全体どうなってしまうのか、見通しのつかないまま編集作業は続く。しかしこんなものはまだ序の口、発狂寸前という形容詞がつくのはこれからである……マジで。

12月3日:

表紙・グラビア

どうしよう

編集長復活。進行状況を確認。表紙、グラビアが手つかずであることに気付く。あわててネタを探しに総科内を探索。一時間歩き回ってあきらめ、手持ちの写真でどうにかすることに。



それでも飛翔は続いている……

(文責: 黒屋 敦)

編集後記

■富樫 一巳（編集長，自然環境研究コース助教授）

総合科学部を取り巻く環境は今も厳しい。他学部比べて本学部の教官は授業時間が随分多い中で研究と教育を行っている。また、事務室では夜遅くまで明かりがついている。アトランタ五輪で、有森裕子さんが自分に対して投げかけた言葉は総合科学部にも当てはまると思う。その有森さんはしばらく休むという。大事なことだ。総合科学部にも心のゆとりが生まれるような時間が必要な気がする。今度の号は総合科学部を取り巻く状況とそれに対する構成員の奮闘、意識そしてばやき？を集めた。それはこの時期を記録したいと願ったからである。この意図が達成されたかどうか、折りがあれば知らせて戴きたい。

今回も色々な方々にお忙し中を寄稿して戴いた。深く感謝する次第である。とくに、西条警察署の林次長には厚くお礼申し上げる。そして、学生と教官と事務官の数少ない編集委員にも。

■安仁屋宗正（外国語コース助教授）

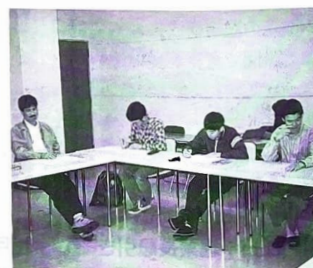
前回の編集後記で、「もっと手伝わせてくれ」と書いたら、マジに仕事きた。学生諸君はシッカリしている。原稿などをたのむときにはその調子でやるとよい。もう一步踏み込んで、知識を偏重し己の浅はかな夢を貪っている、暇潰しの教官連中（仏教ではそう呼ばれている）をどんどんつついて「もういちとは、学生の面倒もみてくれ」とおどしをかけ、肉体労働もさせたほうがええんじゃないかな。次号からは、学生がもっと主導権をにぎり、上空を飛翔して下界の俗世の闘争をおもしろおかしく書き詰めるのがよろしいのではないかと考えておるんだけど。いかがなものでしょう。

■渡邊 忠信（社会科学コース3年）

この2年間、飛翔という「裏の実行部隊」で“dirty work”に就いてきた。メチャクチャきつかった反面、とても楽しかった。自分のやりたいことをそれなりにやってきたつもりではいるが、釈迦の掌の上を飛び回る孫悟空のように、総合科学部という大きな組織の中で自分という存在のちっぽけさをいやというほど再確認してしまった。非常に有意義な体験だったと思う。働きアリのうち本当に働くのはごく一部分に過ぎないというが、働く働きアリを見習いたい今日この頃だ。

■照屋 敦（人間文化コース3年）

ひょんなことから飛翔の編集に携わるようになって早二年。教官からは学生の悪ふざけ、学生からは堅くて面白くないという正反対の不評を耳にする。しかも間接的に。読まれる飛翔・考えさせる飛翔を目標に死ぬ程努力し、絶望して飛翔そのものにとどめを刺そうと思った事もした。無論改善の余地は多々あるが、ようやく、少なくともそんな陰口より、自分が考え、動いて、つくりあげた事に誇りを持てるようになった。「それでも飛翔は続いている」。あばよ！



■磯崎 由行（学生編集長，自然環境研究コース2年）

年功序列の悪弊により無能・無気力・無関心の三拍子揃った自分が仮にも編集長となってしまう、内外問わず多大な迷惑を掛けてしまった事をお詫びしたい。本人はそれなりに頑張った心算だが、それでも足りぬと言うなら仕方がない。歴代で最も無能な編集長と嘲ってくればそれで良い。紙面に対する責務は負うが、それを反省し改善していくのは我々だけの仕事ではないはずだ。何より読者の生の声が届かなければ、改善どころか独り善がりの改悪にもなりかねない。飛翔が「一部の人間が勝手にやっている事」と認識されている限り、我々としても「税金のムダ遣い」という後ろめたさを負い続けなくてはならないのだ。

■亀井 幹夫（1年）

まず、私用で作業に開れない日が多く、（学生）編集委員の皆様迷惑をおかけしましたことをこの場を借りておわびします。

それはともかく、今のように一部の（特に学生）に大きな負担がかかる編集体制には疑問を感じざるを得ません。本業をおろそかにしてまで、飛翔を発行し続けることに何らかのメリットがあるのでしょうか？まあ、いずれにしても、（今後も飛翔を発行し続けるのであれば）現在の編集体制を何らかの形に改める必要があるように私は感じます。

■石橋 淳也（1年）

人手が欲しい。そんな欲望に苛まれていた私に惜しみない協力をして下さった多くの方々、特にくそ忙しい中面倒な仕事を引き受けてくれた鍋さんと照さんに心から感謝します。ちなみに飛翔の仕事はピンキリです（含励まし。「読んだよ」と言ってくれるのが一番嬉しかったりする）。いろんな人と関わる中で飛翔を作っていければなあ、と最近思うじゅんやです。

■有村 大士（1年）

私は飛翔編集室にただ遊びに行っていただけだったが、書かないかといわれたので書いてみました。ここで私が書きたいことは2つあります。まず飛翔編集室で働いていらっしゃる編集委員の皆さんへ一言。いつもじゃましてすみません。そして働いていない編集委員とその私を含めた学部生へ一言。飛翔という学部の雑誌の編集を、一部の編集委員におしつけるのはもうやめようではありませんか。仕事をちょくちょく見ていて、本当にそう思いました。だからといって私が出来る事は皆無に等しいのですが。

編集委員（実員12名）

教官：富樫一巳（編集長，自然環境研究コース助教授）・安仁屋宗正（外国語コース助教授）
山崎修嗣（社会科学コース助教授）
事務：山本秀康（学生係長）・友田淳子（学生係）
学生：渡邊忠信（社会科学コース3年）・照屋敦（人間文化コース3年）
磯崎由行（自然環境研究コース2年）・亀井幹夫（1年）・石橋淳也（1年）
松川祥広（1年）
有志：有村大士（1年）



飛翔伝言板

●おわびと訂正・補足

飛翔51号の記事において、一部間違いがありました。p.29の井上先生のエッセイの表題でロシア語の表記が「СОЛНЦЕ」となっていたが、これは「СОЛНЦЕ」が正しい表記です。p.35の奥村先生の研究室の紹介で、部屋の番号が「A714」とあるのは「A814」の間違いでした。以上は学生編集委員の編集上のミスであり、関係各位にはたいへん迷惑をおかけする結果となりました。おわびして訂正いたします。また、51号裏表紙の写真は千田校舎の解体の様子を写したものです。

以後、このような事がないよう、校正には十分気をつけますので、何卒ご容赦ください。

●卒業生への通信

卒業2年目以降の方に対しては、希望者にのみ郵送することになっています。引き続き「飛翔」の郵送を希望される卒業生は、1997年7月までに下記の住所宛にハガキでご連絡下さい。

〒739 東広島市鏡山1-7-1 広島大学総合科学部飛翔編集委員会

◆「飛翔」は年2回発行、春と秋に配布します。

学生編集委員・原稿募集

飛翔では学生編集委員を随時募集中。

経験不問。年齢・性別・学部・学科も問いません。

暇な人・興味のある人は一度編集室を訪ねてみて下さい。

「一日編集委員」もOK。

取材・執筆から写真・イラスト・レイアウト等どこかに必ず「あなたのページ」があるはずです。

「持ち込み記事」も同時募集しています。

エッセイ・イラスト等直接紙面を飾るものから特集記事のテーマ・アイデアの断片まで、なんでもOK。

「飛翔」を面白くするのは、あなたです。



飛翔編集室は、事務棟1階入口を入って右側にあります。

総科の四季

